近世後期の対露認識　―その南下をめぐって―

要約

18世紀後半から19世紀にかけて、北から迫りくるロシアに対して、日本人は脅威感を抱いたという印象が強かった。例えば、1771年、幕府はロシア人南下の形勢がいかに切迫したものであるかとの情報を受けとるハンベンゴロウ事件（中国では本尼奥夫斯基事件）とそれから約十年後に、ロシアの南下を警告した書が次々と現れた、いわゆる「北方文献ブーム」（和田敏明、1985）である。ところが、当時の史料を踏まえてみれば、ロシアに対し、危機感がありながらポジティブな態度をとる日本人もいる。本文は、従来の印象と違ったような記述に注目し、日本人のロシア観を垣間見るものである。

鎖国下の日本はロシアに限らず、接近してくる各国勢力に危機感を覚えるが、ロシア事情研究はとくにブームになる。関連史料の中で、ロシアはカナ表記でオロシア（時にオ▶ヲ、ア▶ヤ）、ロシーア、モスコビア、あるいは漢字表記で鄂羅斯、魯西亜、莫斯哥(未亜)として多出する。以下、ロシア関連史料から、日本人のロシア観を表す記述を踏まえながら考察を行いたい。

1. 莫斯哥未亜は、欧邏巴の東北の国にて、亜細亜の西北に在り、其の地は広大にて、東西一万五千里、南北八千里、中は十六道に分つ。俗は勇強を尚ぶ、国主は日に呑併を事とし、四方は咸な其の威を懼る。（平沢元愷『瓊浦偶筆』）
2. ここに欧羅巴州にロシーヤと称する一大国あり。…今唐山の書に鄂羅斯といふ、即是也。其俗務めて四方を併呑し、さきに所謂曠漠の地すら今はことことく其有たれとも、尚たらすとして東アメリカ州に至り、南我毛人の境界を犯す事、皆世に詳にする所なれは、ここにしるさす。（山田聯『予見録』）

史料①②から、ロシアは大国にして「呑併」（侵略）を好み、恐るべき国であるという認識が現れている。さらに、その勢力は南へ蝦夷地まで及ぼしたという。

1. 今は既に天下の大世界大半モスコビアに属したるは、只女帝エカテリナ治世を以て最多となし、干戈を用て伐取たるは少く、皆大徳を博布して服し随ふ国のみ多し。干戈を用て服したるを第二とし、只徳行を博布して国を得を真の属国とす。干戈を用ひたるは内心に迄は至らざるゆへならん。(本多利明『経世秘策』)
2. 已む事を得されば妄りには剱擊を用ひざるにや。人々堅くこれを守り、各々衆を懐け、国を弘め、益々張大の業を盛にし、上下此一事を勉強し、功労を厭はず、勲績を立るのならはしと思はるる也。／我奥蝦夷にての国々、島々固より野鄙僻陋の愚民どもと見ゆれば、猶以て礼を厚ふし、恩義を加へて、無き所の物を與へ、愛語軟言を用ひて悦服せしめしことと思はるる也。（大槻玄沢『北辺探事』）

また、史料③④から窺えるように、ロシアを「干戈を用て伐取たるは少く」、「妄りには剱擊を用ひざる」国と考え、武力を用いる代わりに「徳行」をもって他国を従服させたのであると認識することは少なくない。蝦夷地においても同様であり、いわゆる懐柔策をもって土人を「悦服」させるのである。

枚挙に暇がないが近世の日本人はロシアの領土的野心と、その南下に対して危機感を覚えるが、徳のある大国という信頼感を同時に持つ時期があった。「蛮夷」と呼びながらも敬意を読み取らせる。領土的野心を認めるが、懷柔策がメインである。隣近界にあると認識するが武力侵略の可能性は低いと、認識されていたことが分かる。これと関連して、ロシア非侵略論も挙げられる。このような楽観的考えはロシア南下に対する認識に浸透し、また、幕末の親露観やイギリスに備えてロシアと同盟を結ぶ論説へも繋がる。